

四季成イチゴの収量に及ぼす定植期と花房摘除の影響

藤野 雅丈・高田 勝也

(野菜・茶業試験場盛岡支場)

Effects of the Planting Time and the Flower Removal on the Yield of Ever-bearing Strawberry

Masatake FUJINO and Katuya TAKADA

(Morioka Branch, National Research Institute of Vegetables, Ornamental Plants and Tea)

イチゴは、近年、作型の分化が進み、ほぼ周年的に生産されている。しかし、夏秋期の栽培は難しく、生産量は少ない。一方、需要の増加は著しく、これを補うため輸入量が年々増加している。北海道・東北や高冷地では、その冷涼な気候を利用して、夏秋どりの栽培が増加しているが、7月の露地おそ出し栽培以外は、長期株冷蔵や短日処理等、労力と経費がかかり、また、収量も低いため、生産コストを高くしている。

一方、最近「盛岡24号」をはじめ、優秀な四季成品種が相次いで発表され、また、四季成品種の夏秋期の生産への活用が論じられている¹⁾。しかし、四季成品種は、我が国での栽培がまだほとんどなく、作型が十分には確立していない。このため、四季成品種の特性を十分に生かせる作型

を開発するための資料を得ようとして本試験を行った。

材料及び方法

「盛岡24号」, 「大石四季成2号」, 「Rabunda」の3品種を用い、試験区として①1985年9月26日定植, 9月26日まで花房摘除, ②9月26日定植, 翌年5月20日まで花房摘除, ③9月26日定植, 翌年7月15日まで花房摘除, ④1986年5月20日定植, 5月20日まで花房摘除, ⑤5月20日定植, 7月15日まで花房摘除, ⑥7月15日定植, 7月15日まで花房摘除の6区を設けた(図1)。各品種とも、1985年8月中旬に採苗し、苗床へ10cm×10cmに仮植した。本圃は、うね幅150cm, 株間30cmの2条植えで、施肥量は、N: 3.1, P₂O₅: 2.1, K₂O: 2.1kg/aの全量基肥とし、追

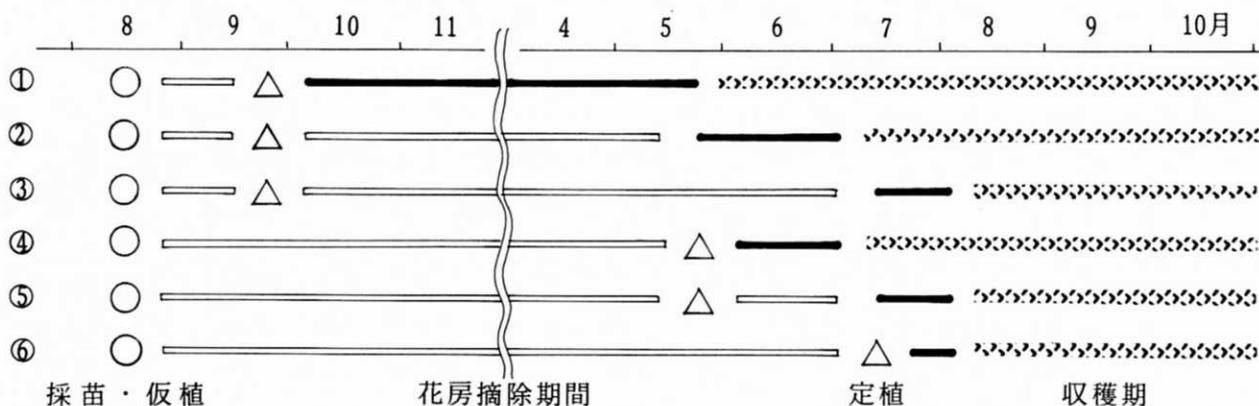


図1 処理区の構成

肥は行わなかった。

結果及び考察

処理区ごとの月別株当たり収量と平均果重を図2に示す。いずれの品種でも、総収量は秋植えて花房摘除しない区(処理①)が最も優れたが、そのピークは6月で、普通品種と同時期となり、四季成品種としての特徴が出せない。秋植えて花房摘除した区(処理②, ③)は、収穫初期の果実は大きいものの、収量が低く、特に、遅くまで花房摘除した区が低収で、これは、花房摘除の影響のほか、おそらく肥料切れの影響もあったと推察される。

春植えの区(処理④, ⑤)では、収量ピークが8~9月になり、総収量もかなり多い。ただし、ピーク時の上物率は6月に比べ、かなり低くなる。この主たる原因は奇形果

の増加による。しかし、8~9月は普通品種では収穫できない時期であるため、四季成品種としての特徴が出せる作型と考えられる。夏植え区(処理⑥)では9月に収量ピークがくるが、全体に低収であり、果実も小さい。

品種では、「Rabunda」がいずれの作期でも収量が高いが、果実が非常に軟らかいという欠点があり、実用的には問題となろう。

以上のことから、四季成イチゴでは、収量などに対して、定植期と花房摘除の影響が相当大きく認められ、特に、定植期を変えることで収穫期をかなり調節できるものと考えられた。また、秋苗を使用した作型では、定植後の長期間の花房摘除処理は、目的の時期に収量ピークをずらす効果が認められるものの、全体の収量レベルを下げるので、あまりよい方法とは思われなかった。

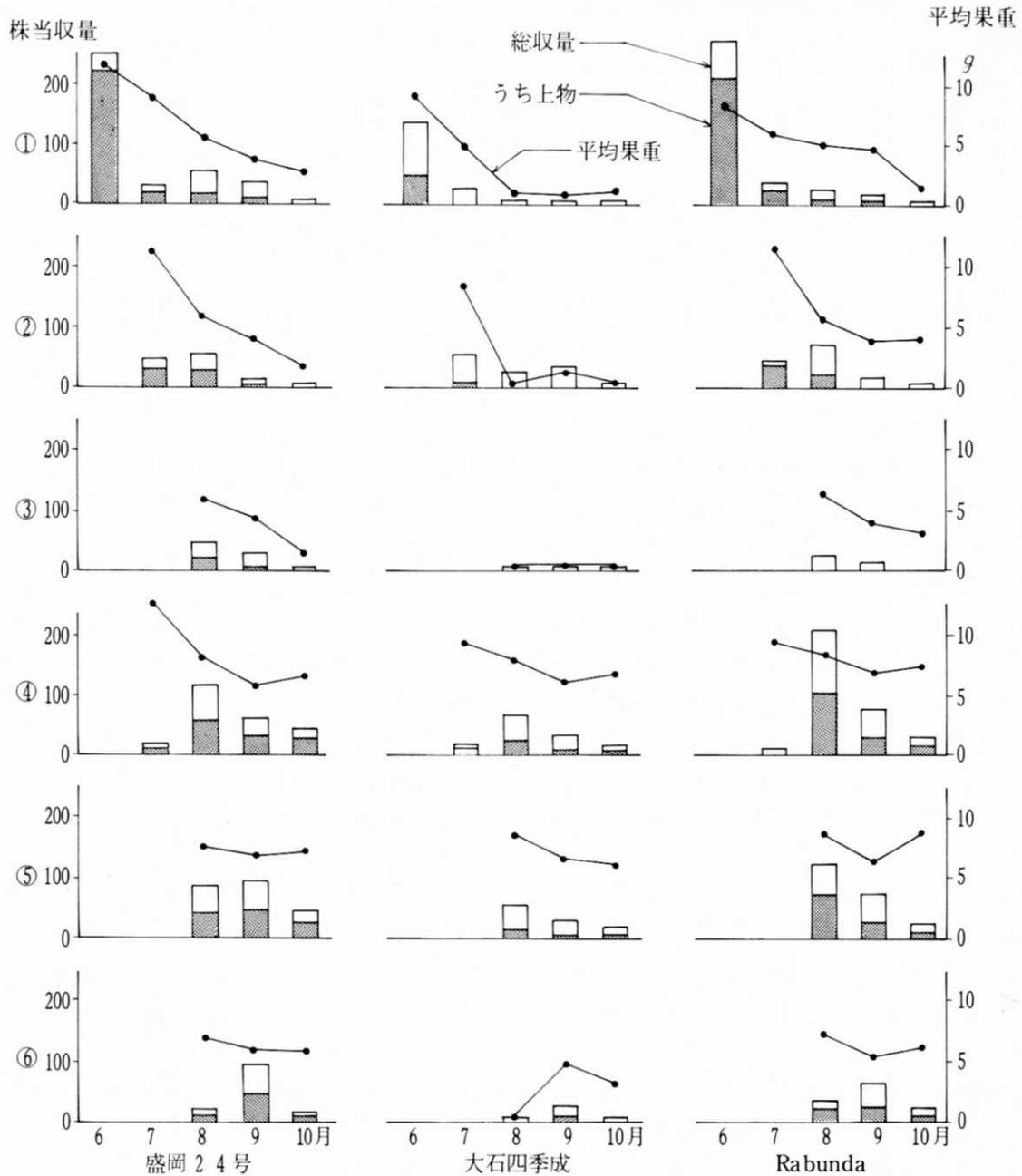


図 2 処理区ごとの月別株当たり収量と平均果重

盛岡地方では、夏季には相当高温となり、奇形果や日焼け果の発生が多くなるため、夏どりよりも、むしろ、秋どり栽培のほうが好ましいと考えられるが、上記の結果から、このような作型に秋苗を使用するのはあまりよい結果をもたらさないで、春苗の利用を検討すべきであろう。

摘 要

四季成イチゴの作型を検討するため、秋苗を使って定植

期と花房摘除処理の影響を調べた。その結果、定植期と花房摘除処理は収穫時期、収量に大きく影響することが判明し、夏どり栽培では春植えが好ましいと考えられた。

引 用 文 献

1) 門馬信二, 興津伸二, 高田勝也. 1985. 四季成イチゴとその品種特性. 農及園 60 : 443 - 449.